



世界も、自分も、変えるシゴト。

「自分の力で開発途上国を元気にしたい」とJICAの青年海外協力隊に参加した人たち。海外でのボランティア活動を終えて帰国した彼らは、今は「地域を元気にする人材」として、中国地方の各地で活躍しています。このパンフレットでご紹介したのは、そのうちの10人。彼らの活動を通して、JICAの青年海外協力隊をさらに理解していただければ、幸いです。

日本も元気にする 青年海外協力隊 in 中国地方



島根県
中山 義規
柔術指導

ブラジリアン柔術を通して多文化共生。



山口県
三原 善伸
短大講師

地域で、海外で、「できること」から貢献。



鳥取県
ジュバテ麻子
ギニア音楽演奏者

アフリカのリズムが子どもを動かす。



広島県
木村 哲也
建築家

地元への愛着が活動の原動力。



岡山県
木下 史子
小学校教諭

子どもたちに共生の心を。



鳥取県
上原 菜生
保育士

多様な幸せ観を子どもに伝えたい。



岡山県
塩飽 康利
農業

自然ゆたかな里山から農業発信!



山口県
松浦 和子
市民活動
支援センター

地域でも人のネットワークを。



広島市
証本 伸悦
大学教員

「自ら考え行動する若者」を育てたい。

独立行政法人 国際協力機構 中国国際センター (JICA中国)
所管地区：鳥取県・島根県・岡山県・広島県・山口県
〒739-0046 広島県東広島市鏡山3-3-1
電話番号：082-421-6300 (代表) ファックス：082-420-8082
www.jica.go.jp/chugoku



島根県
生越 大地
農業

「楽しむ農業」に地域の人が集う。

世界を
元気にした人は、
日本も
元気にできる!



うえはら なお
上原菜生さん
職業 保育士(保育園勤務)
赴任地 ウガンダ
赴任地での職種 村落開発普及員

ウガンダの「幸せに暮らす生き方」子どもたちに伝えていきたい。

「ウガンダから帰って、幸せの価値基準がまったく変わりました」と、上原さんは言います。モノがあふれる日本と、モノがないウガンダ。幸せには価値基準がいろいろあることを子どもたちに伝えたい——保育士としての上原さんの想いです。



プロフィール
鳥取県江府町生まれ。一般企業を経て青年海外協力隊員に。2006年から2年間、ウガンダで教育施設の充実支援にたずさわる。帰国後保育士の資格を取得し、米子東保育園に勤務。

頑張ってるお母さんを しっかりサポートしたい

上原さんは、大山中腹の小さな町で生まれ育ちました。

「私が小学生の頃は、クラスに22人も友だちがいたんですよ。それが、今は1クラス10人ほどですって」

少子化が進む一方で、保護者が共働きの家庭も増加。特に地域では、少子化に歯止めをかけるためにも、社会全体で子育てを支援する仕組みが、求められています。上原さんが勤務する米子東保育園も、共働きの家庭をサポートするため1歳児から預かっています。

「そんな難しいことを考えてるわけじゃないけど、園児のお母さん方、頑張ってお



ウガンダの学校。設備は整っていないが、子どもたちは学校が好きだ。



ウガンダの子どもたちとクラフトを作り、日本で販売して図書室建設の資金を作った。クラフトは、今も上原さんの携帯電話に。

られるんですよ。皆さん、私と同じくらいの年代でしょう。私もすっかりしなくちゃと思います」

子どもと関わる仕事がしたい！ 途上国で見つけた進路

上原さんの人生を変えたのはウガンダの子どもたち。勤めていた会社を辞め、新しい生き方を探して青年海外協力隊に参加した上原さんは、ウガンダで学校の教室や図書室建設をサポートする活動を担当します。そこで出会った子どもたちの笑顔に、上原さんは魅せられました。

「元気で、素直で、好奇心いっぱい。本当に可愛い。日本でも、こんな子どもたちといっしょに過ごしたいと思ったんです」

保育士という目標を見つけた上原さんは、早速、資料を取り寄せて勉強を開始。帰国してすぐ、保育士試験を受け、資格を取得しました。

子どもたちの心を豊かに育てる ヒントがウガンダにある

「ウガンダは、物質的には豊かではありませんが、大人も子どもも、いつも楽しそう。心の豊かさがあるのだと思います」

世界にはいろいろな人がいて、それぞれ幸福の価値観が違います。そのことを、なんとか、子どもたちに伝えたいと、上原さんは言います。「今」を楽しみ、自分なりの幸せを感じてほしい——子どもたち一人ひとりを心豊かに成長させることこそ、ウガンダの子どもたちと過ごした自分の仕事だと、上原さんは考えています。

実は、この取材の1カ月後、上原さんは結婚することになっていました。仕事は？とたずねると「保育士は、出産や子育てがキャリアになる仕事。ずっと続けたい」という返事が返ってきました。

鳥取の子どもたちから全国へ。 広がれ、元気なアフリカのリズム。

青年海外協力隊員として過ごしたアフリカで、麻子さんは日本とはまったく違う魅力に惹かれました。底抜けに明るくて、パワフル。夫アラマさんのたたたく太鼓のリズムに乗って、アフリカのパワーが子どもたちの心を開いていきます。



あさこ
ジュバテ麻子さん
職業 ギニア音楽演奏者
赴任地 ジンバブエ
赴任地での職種 青少年活動



プロフィール
鳥取県倉吉市生まれ。中学講師を退職して2000年、青年海外協力隊に参加。ジンバブエで体育普及活動に従事。帰国後、ギニア出身のアラマ・ジュバテさんと結婚。全国で演奏活動を行っている。

地元の子どもたちに 異文化に触れる機会を

「この太鼓は“ジェンベ”と言います。ギニアでは、この太鼓にあわせてみんなでダンスをしながら稲刈りをするの」ジュバテ麻子さんの説明に、子どもたちが食い入るように太鼓を見つめます。

この日は、公民館で約30人の子どもたちを前に、麻子さんの夫、アラマさんがジェンベの演奏を披露。次年度から中学生になる子どもたちを祝いました。

アラマさんはギニアの民族音楽伝承者として、世界中にネットワークを持ち、日本でも全国で演奏活動を行っています。



ジェンベの音を聴くうちに、子どもたちはすぐにリズムをつかみ、アラマさんのリードで踊り始める。

「夫のアラマは、1年の半分以上、演奏活動で全国を回りますが、鳥取県内では、私といっしょに幼稚園、小学校、養護学校、特別支援学校や地域の行事に出向き、子どもさんたちに音楽を聴いて体験してもらってるんですよ」

アフリカのパワーが 子どもたちの心を開かせた

夫妻が、心や精神に問題をかかえた子どもたちが通う養護学校を訪問した時のことです。先生方は「ウチの学校の生徒がダンスを踊るなんて無理だろう」と半分、諦め顔。ところが、ジュバテさんがジェンベをたたき、リズムに乗せてダンスをすると、みんなが真似をして楽しそうに踊り始めたのです。麻子さんは、その光景を今でもはっきりと覚えています。

「アフリカの音楽には、人の心を動かすパワーがあるんです。子どもたちは、感性で音楽のパワーを感じ取って体で反応し、心を解放していくのだと思います」

こうした夫妻の活動は、地元のテレビや新聞でも報道され、これまでに訪れた場所は、鳥取県内だけでも延べ100カ所を超えました。



公民館のイベントでは、子どもたちが食事を作ってジュバテさん家族をもてなしてくれた。

エネルギーな未知の文化が 心の視界を広げる力に

青年海外協力隊員としての任地はジンバブエ。そこで、麻子さんはアフリカの魅力に惹きつけられました。

「確かに、援助を必要としている地域も多いけど、アフリカには日本にない魅力があります。あの明るさ、パワフルさ、そのシンボルとしての音楽を通して、アフリカの素晴らしさや、生きる力を日本の子どもたちに伝えたい。それが協力隊を経験した私の使命です！」

自分たちと違う文化に触れることで、心の視界はどんどん広がります。それは、閉塞感を打ち破るエネルギーになるかもしれません。ジェンベの力強い音は、そんな可能性を感じさせます。



おこしだい
生越大地さん
職業 農業
赴任地 中国
赴任地での職種 果樹

考え、工夫しながら「楽しむ農業」 『わなか農園』は、地域の交流拠点。

『わなか農園』は、農業と地域との交流拠点。経営者の生越大地さんは青年海外協力隊員として赴任した中国で、日本の農業の素晴らしさを再認識。「楽しむ農業」を目指して、地域に新しい風を巻き起こしつつあります。



プロフィール
島根県大田市の農家に生まれる。大学で農学を学び、島根県の農業改良普及員、農業大学校技師として働く。2000年から青年海外協力隊員として中国で果樹栽培を指導。帰国後、農業後継者として両親とともにイチゴと水稻の栽培を行っている。

イチゴ狩り、稲作体験…… わなか農園には人が集う

『わなか農園』には、さまざまな人がやって来ます。イチゴ狩りにやって来る子どもがいます。営農の勉強にやって来る研修生もいます。「地域の資源は地域で循環させよう」と活動している若手の農業者たちもやって来ます。稲ワラを牛の飼料とし、牛ふんを稲作の堆肥として使用するプロジェクトの仲間です。

幼稚園児の稲作体験は、田植え、草取りから稲刈り、そして収穫した米を使ってのおにぎりパーティまで、作物が育ち、人の口に入るまでの過程をすべて体験してもらうのがポイント。もう3年続いています。

「両親から農業を受け継いだ時、青年海外協力隊の経験を活かし、いろいろな人が集う場にしようと思ったんです」



地域に適したイチゴ栽培など、農業を志望する人々への研修にも積極的に協力している。

日本農業の素晴らしさを再確認 技術を磨いて次の世代へ

青年海外協力隊での生越さんの役割は、中国でのリンゴの栽培指導。そこで多くのことを学んだと言います。作物を育てるにも“人の和”が大事だということ。日本の農業技術がきわめて先進的だということ。そして、それが、何代にもわたって地道な工夫を積み上げてきた日本の農業の素晴らしい成果だということ……。

「そういう日本の農業を自分のものにしてきたら、すごく達成感があるだろうなと思いましたね。農作物は一年一作が基本。一生の間にできることが限られているからこそ、いろいろな人の話を聞いて情報を集め、試行錯誤しながら改善し、次の世代に受け継いでいきたい」

それが、人が集まる『わなか農園』の実現につながっていきました。

健康を支える“食” 人の関心が農業者を育てる

ワナカは、ニュージーランドを自転車旅行したとき訪れた場所。自然と人の生活が共存して見事に調和していることに感銘を受けました。

「漢字では“和申”。いろいろな人が集う農場という理想にもピッタリでしょう」

農業情報の交換だけでなく、生越さんはさまざまな集まりに参加します。「もちろん、遊びの誘いも断りませんよ(笑)」

生越さんが子どもの頃は、田畑が遊び場でした。近年、次第に農業と人の生活が切り離されてきていますが、生越さんは、作物を育てる現場にもっと関心を持ってほしいと思っています。

「自分たちの健康を支える“食”ですからね。消費者の関心が、農業者を張り切れ、育てるんですよ」

人が集まり、農業や食に関するいろいろな情報が行き交って、それを作物作りに活かしていく——生越さんが目指す“楽しむ農業”の姿が、そこにあります。



幼稚園児の田植え。人の口に入るまでに、長い時間と手間がかかっていることを学ぶ。



なかやまよしのり
中山義規さん
職業 農業、ブラジリアン柔術指導者
赴任地 モルディブ
赴任地での職種 村落開発普及員

開発途上国での経験が教えた 「多文化が共生するための技」。

中山義規さんは、さまざまな国の言葉を話します。いや、言葉を介さなくてもいろいろな国の人とコミュニケーションする術を知っています。ボランティア活動を中心とする多くの国々での経験が、国籍を超えて交流できる人を育てたのです。



プロフィール
島根県出雲市生まれ。大学時代から開発途上国でのボランティア活動に参加。卒業後の1996年、青年海外協力隊でモルディブへ。現在は自然農法を研究しながら、ブラジリアン柔術を指導している。

モルディブで知った 多文化が共生する社会の課題

中山さんが青年海外協力隊の村落開発普及員として赴任したのはモルディブ。インド洋の島国です。

「開発途上国とはいっても、モルディブは南アジアの中では比較的に裕福な国で、



モルディブでの任務は村おこしのサポート。現地の人々ともすっかりなじんだ。

近隣のインド、バングラデシュ、スリランカなどから出稼ぎが多くきていました。これらの人との間の経済的な格差や文化的な摩擦が気になりました」

多様な文化圏の人が共に暮らす地域は日本でも全国に増えています。出雲市郊外でコンデンサを製造している大手メーカーの工場でもブラジルの人が大勢働いていますが、そのほとんどが、地域のコミュニティと切り離されて生活しています。

ブラジルの人気スポーツで 言葉を越えた意思疎通

故郷を遠く離れて、言葉も生活習慣も異なる国で働く人たちと、どうやって交流していくか——モルディブから帰国した中山さんは、自宅の一部を改造してブラジリアン柔術の道場を開くことにしました。

ブラジリアン柔術は日本からブラジルに伝わった柔道・柔術が、寝技中心の独特な形式に発展したもので、ブラジルの人気スポーツ。体格によらず楽しむことができます。日本でも愛好者が増えつつあります。また、中山さん自身、ブラジルを訪れたこともあり、ブラジルの人とポルトガル語で意思疎通することもできます。

「道場というよりも、練習場。月1,000円を出し合ってみなで練習し合う場、そして交流の場なんです」と中山さん。柔術だけでなく、家族を含めて鍋や焼肉な



ブラジル人も日本人も、男性も女性も、中山さんの道場にはいろいろな人が集まる。

どの会食イベントを開き、交流の機会を拡大しています。

闘うためではなく 人と人が仲良くなる格闘技

日系ブラジル人のツネタ・ジオゴさんも、中山さんの道場に通う一人です。

ツネタさんはブラジル人の妻と一緒に来日しました。日本語は少し話せますが、気持ちを十分に伝えられるほどではありません。しかし、ここに来れば中山さんとコミュニケーションでき、柔術を通して日本の人と交流できます。

中山さんは言います。「ブラジリアン柔術は体を密着させて技をかけ合うので、人と人が仲良くなるには格好のスポーツ」イキイキと動き回るジオゴさんの姿が、その言葉を証明しているようです。



しわく やすとし
塩飽康利さん
職業 農業
赴任地 エチオピア
赴任地での職種 農業土木

自然ゆたかな里山から発信！ 世界の「食」を支える農業の力。

青年海外協力隊での経験と、農家に生まれ育った強みを生かし、農業と食を通じた国際貢献・救援をモットーに活動する塩飽さん。農作物の栽培、加工販売と併行して、農業に関わる支援や、自然災害・紛争地への救援活動を行っています。

プロフィール

岡山県井原市出身。1986年、青年海外協力隊員としてエチオピアで農業施設の建設支援。帰国後『塩飽農園』を設立。2004年より『ももたろう国際救援隊』として国内外のボランティア活動に携わる。



エチオピアで改めて見直した“食”と農業

岡山県井原市の山間部。ゆたかな自然が残る地で、米や野菜、栗やブドウなどを栽培し、それらを使った加工品の開発から販売まで幅広く手がけるのが塩飽さんです。

『塩飽農園』設立のきっかけは、エチオピアで感じた“食”の大切さ。人々が食べ物で困っている現状を見て、農業の使命を再認識したと言います。

「ここは高齢化が進む何もない農村です。でも、この土地を生かして農作物を作ることによって地域が元気になり、その経験が、いつかまた海外でも役立つだろうと考えたのです」



地域の農家と提携して農産物加工品や薬膳ジェラードなどオリジナル商品を製造。ネット販売している。

開発途上国の人みずからの手で国の未来を作してほしい

小学校時代、社会科の授業で世界の運河を拓いた偉人の話を知ってから、いつかは「技術力」で人の役に立ちたいと思いつけてきた塩飽さん。アフリカの飢餓が報道されるようになった頃、青年海外協力隊に参加。そのアフリカで、現地の人をサポートして、水路や池作り、給水の設備などに携わりました。「しかし……」と、塩飽さんは言います。

「ただ与えるだけでは、開発途上国の人の意識は変わりません。生活を豊かにする術を自分たちで考え出せるよう、意欲を促し手助けをすることが、協力隊の任務だと思いましたね」

農業と食を通じて地元を、地球を元気にしたい

その経験から、塩飽さんが力を入れているのが就農支援です。農業に興味を持つ人に、農地をリースして栽培方法を指導。コンニャク作りなどの体験を通して、食品加工の楽しさや難しさも伝えます。また地域活性化を目指し、地元の若手生産者とのネットワークも広げています。



エチオピアでは農業土木を指導

さらに、国際貢献に関わる救援団体『ももたろう国際救援隊』にも設立と同時に参加。これは、「国際貢献先進県」を目指す岡山県が設立した公設国際貢献大学の事業で、地震や津波、台風などによる国内外の被災地に出かけ、救援活動を行うもの。塩飽さんの「地域を元気にしたい」という思いは、国境を越え、地球全体に広がっていきます。



2009年、台風で大きな被害があったフィリピンに向け、ももたろう国際救援隊として、支援物資を送り出した。



きのした ふみこ
木下史子さん
職業 小学校教諭
赴任地 ニジェール
赴任地での職種 青少年活動

海外での経験を授業に生かし、子どもたちに“共生の心”を。

木下さんは小学校の先生。青年海外協力隊に参加してニジェールに赴き、現地の子どもを支援してきました。帰国後、途上国への理解を深める授業を取り入れ、子どもたちの学習意欲を引き出し、積極性を育てるなどの成果を挙げています。



プロフィール

兵庫県で育ち、岡山県の大学へ。2005年『現職教員特別参加制度』で青年海外協力隊に。ニジェールで青少年活動に従事する。帰国後、勤務校の倉敷市立老松小学校で、国際理解教育を進めている。

路上で教えることで見えた子どもたちの素顔

高校時代から、海外ボランティアに興味を抱いていた木下さん。小学校の教員をしながら、岡山県の国際貢献事業でタイへ。さらにJICAの教師海外研修でエチオピアを訪問。その経験を足がかりとして、青年海外協力隊に参加し、アフリカのニジェールに出かけました。

現地での活動は、主に学校に行けない子どもたちに、路上で字の書き方や計算の仕方、絵本の読み聞かせを行うこと。“路上の教室”です。

「物珍しさから集まってきた子どもたちは、好奇心旺盛でイキイキしていました」



ケニアについて調べて発表する児童。参観の保護者も驚くほどの出来映えだった。

ニジェールの人々をもつ温かな思いやりの心

農業が主要産業のニジェールでは、子どもは、学校に行かないのが当たり前。その分、よく働き、精神的にたくましく、家族思いだったそうです。

「貧しいけど、お互いに困っている人を助けようという心をもっています。その優しさを日本の子どもたちにも伝えたい」

帰国して学校に戻った木下さんは、児童が親しみやすいゲーム形式を授業に取り入れながら、「人間にとって本当に必要なもの」や「自分たちの暮らしと途上国の現状の違い」に気付く教育を進めています。先生が開発途上国で経験した話は、



ケニアの子どもたちに文房具を贈る活動で、現地で手渡す木下さん。

教科書の文字以上のリアルさで児童に受け止められているようで、環境の違いが人間性の差にはならないこと、差別して始めるよりも助け合って生きる方が理にかなっていることなどを、児童は無理なく理解していきます。

相手を理解して「共生」の方法を考える

「子ども同士を交流させませんか」木下さんと同じく、現職教員としてケニアに赴いている青年海外協力隊員の申し出から、クラスの子どもとケニアの子どもの交流活動も実現しました。

子どもたちは半年間、ケニアについて学びました。まず相手を理解することが大事だからです。そのうえで、文房具を持たないケニアの子どもたちのために、自分たちが書いた絵や習字といっしょに鉛筆や消しゴム、クレヨンなどを贈ったのです。

中には、「自分では使わないけど、それを譲ることが誰かの役に立つ」という喜びを、作文に綴った児童もいました。児童の心に、着実に「共生」の意識が芽生え育っているようです。



木村哲也さん
職業 建築家
赴任地 ホンジュラス
赴任地での職種 建築施工

ホンジュラスで学んだのは 地元を愛する気持ち。

木村さんが生まれ育ち、今も拠点とする東広島市にはさまざまな国の人が暮らしています。青年海外協力隊で赴任したホンジュラスで、人々の地元への愛着に触れた木村さん。地元を目に向け、地域を活性化する活動に乗り出しました。



プロフィール
広島県生まれ。建築事務所勤務から、青年海外協力隊に参加して2006年にホンジュラスへ。帰国後、念願の『木村哲也建築デザインオフィス』設立。地域の活動にも積極的に取り組んでいる。

2年間で120軒の住宅建設 家づくりの原点を見た

ホンジュラスの田舎で見たのは、電気も水道もない集落で、自給自足の生活をする人たちでした。

「建築指導といっても、ホンジュラスの家は、日本でやって来た建築とはまったく違う。『アドベ』と呼ばれる、日干しレンガやブロック積みの家です。2年間で120軒ほどの住宅建設を指導しました」

最新の工法やモダンなデザインを追求してきた建築家の木村さんとしては、戸惑いもあったのではないのでしょうか。

「いえ、家づくりの原点に触れることができました。作業は現地の人たちが主導



それぞれの地にそれぞれの住まい方がある。ホンジュラスで文化の違いを思い知らされた。

で行い、家が完成するとみんなが集まり、泣いて喜んでくれました。それに、自分たちの集落や国にもものすごく愛着を持っている。そのことに感動しました。それに比べて、私は地元東広島市のことをほとんど知らない。それがショックだった」

『西条酒まつり』の裏方として 地域に関わる

帰国した木村さんは積極的に地域に関わるようになりました。ホンジュラスでの経験を子どもたちに伝える講演活動。そして、外国からやって来た人に日本語を指導するボランティアも行っていきます。

東広島市では、毎年秋、全国から数十万人を集めるビッグイベント『西条酒まつり』が開かれます。これを支えるのが地域のボランティア。木村さんも、実行委員

会の一人として、数カ月にもわたって裏方の仕事をこなします。

異文化体験できるイベントを 地元で実現したい

東広島市には大学や研究所、電子部品メーカーの工場などがあり、広島県でも2番目に外国人が多く居住しています。ここで、外国の人たちが、自国の文化を発表できるイベントの開催を計画中。

「私も、ホンジュラスで和太鼓や獅子舞を披露したんです。東広島は世界から人が集まるまちですから、市民も、居ながらにして異文化に触れることができるはずでしょう」

青年海外協力隊の経験が、東広島の異文化体験イベントとして花開く日が待たれます。



地域のビッグイベント『西条酒まつり』。木村さんたちボランティアが裏方として支える。



榎本伸悦さん
職業 大学教員
赴任地 パプアニューギニア
赴任地での職種 体育

助けることは助けられること ボランティアは自分のためでもある。

広島経済大学は「ゼロから立ち上げる人材の育成」を目標に『興動館教育プログラム』を展開しています。その中核を担う一人が、プロジェクトのセンター長を務める榎本さん。青年海外協力隊員としての自身の経験を学生たちに伝え、「自ら考え行動する若者」を育てることに全力を傾注しています。



プロフィール
岩手県出身。大学卒業後すぐに青年海外協力隊員としてパプアニューギニアに赴任。帰国後、小学校教師を経て大学院で学ぶ。現在は広島経済大学教員、興動館プロジェクトセンター長。

“マジックアワー”を 楽しむ心のゆとり

大学を卒業するとき、榎本さんは、決定していた小学校教員の道を捨てて青年海外協力隊に参加しました。「ワクワクする方を選んだ」と言います。

しかし、地面に穴を掘り、ジャングルで木を切り、それを立てネットを張ってバレーボールを指導する日々。時間になっても集まらない現地の子どもたち……イライラしている榎本さんに、ある人が言いました。「マジックアワーを知っているか？」

日が沈んだ後、残照で風景が最も美しく輝いて見えるわずかな時間。この時間を楽しまないで、人生になんの意味があるか、とその人は言いました。以来、榎本さんの人生観は変わりました。

現地での素晴らしい経験を 学生たちに伝えたい

2年間の任務が終わるとき、榎本さんはそのままパプアニューギニアにとどまって生活することを、本気で考えたそうです。

「助けるつもりで行ったのに、私の方が素晴らしい経験をさせてもらった」

助けることは助けられること——大きな影響を受けた「ミスター NGO」中田正一さんの言葉です。榎本さんは、その後のボランティア活動でも、いつもこの言葉を実感させられてきました。

「得がたい経験をするためには、まず行動を興すこと。そういう学生を育てたい」

地域の問題にもすぐに 立ち上がって行動できる人材を

興動館プロジェクトにはインドネシア、



パプアニューギニアでのバレーボール指導。ボランティア活動やスポーツの楽しさを知った原点。



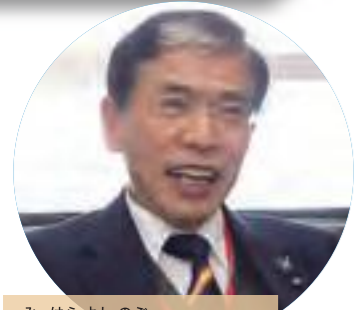
年に1回は、学生たちを率いて開発途上国でのボランティアへ。ここから育つ人材が、地域の問題解決でも力になる。

カンボジア、中国での国際貢献プロジェクトがあります。企画立案から始まり、目標達成のための方法を考え、実施、総括まですべて学生の力でやり遂げるプロジェクト。夏や春の長期の休みには、実際に現地に行って、ボランティア活動を行います。

榎本さんは言います。「こういう経験を重ねることは、相手国のためでもあるけど、それ以上に学生自身をたくましく成長させます。そして、成長した彼らは、地域で何か問題があったとき、解決のためにアクションを起こせる人材となります」

地域でも役立つ興動人——まさに、「助けることは助けられること」です。

※中田正一氏（1906～1991年）
アフガニスタンやバングラデシュで農業指導。井戸掘り技術を中心に国際協力の人材を育てる「風の学校」を主宰し、多くのボランティアを途上国に送り続けた。



みはらしのぶ
三原善伸さん
職業 短大非常勤講師
赴任地 ドミニカ共和国
赴任地での職種 音響

お世話になった地域に、 今、できることで恩返ししたい。

「最高齢の青年海外協力隊員」と三原さんが笑います。「技術で社会貢献したい」と思い立ったのは23歳の時。念願かなって、音響技術職の募集を見つけたのは39歳の時でした。ボランティア活動は高校生の時から。自分にできることで社会参加するという姿勢を、三原さんは今も貫いています。



プロフィール

山口県生まれ。電器メーカーの音響技術者から岩国市職員に転身後、1990年、現職参加で青年海外協力隊に。ドミニカ共和国で音響技師として活動。退職後も、岩国短大非常勤講師のほか地域活動、ボランティア活動を継続している。

地域の生活は 実は、世界とつながっている

「ボランティアは難しいことじゃない。家庭でもできるんだよ」と、三原先生が短大生たちに語りかけます。ペットボトルのフタや古切手を集めれば開発途上国の子どもたちのワクチンになり、空き缶のリングプルが車椅子になるといった“収集ボランティア”を紹介。「気づかないけど、実は地域の生活はそのまま世界につながっている」と結びました。

高校生の時、友だちに誘われて『ユネスコクラブ』という同好会に入ったのがスタート、錦帯橋の清掃奉仕から始まった三原さんのボランティア歴は半世紀近く。



三原さんのボランティア活動は「筋金入り」。現在も募金活動では率先して街頭に立つ。

学生たちへのボランティアの講義も、具体的に实际的です。

焦らなくても明日がある ドミニカ共和国で学んだ生き方

三原さんは、青年海外協力隊員として、ドミニカ共和国に赴任。国立劇場の音響設備の整備に協力しました。

何事も「明日やればいい」で片付ける国民性にカルチャーショックを受けながらの2年間。最後には「むしろ、自分の生き方が変わりましたね」

17年間願ひ続けて、年齢制限ギリギリで青年海外協力隊の夢を実現させた自身の体験も重なり、「焦らなくても、明日がある。夢を持ち続けていれば、きっとかなう」と話す自分になっていました。

帰国後18年経ってドミニカ共和国を再訪した時には、当時の仲間から「早く帰ってこいよ」と誘われたそうです。

子どもは地域で育てるもの 自分もできることで協力したい

観光課長として、岩国市の魅力を世界に発信してきた三原さん。退職後も、子ども会、社会福祉協議会などのリーダーとして地域の人と関わる活動を続けています。



ドミニカ共和国で当時の仲間と再会

「ドミニカ共和国に行っている間、家族は地域の皆さんのお世話になりました。その恩返しができると思っています」

「子どもは地域で育てるもの」というのが、三原さんの持論。「川に入ったり、山でカブトムシを捕ったり、体で自然に触れる体験をさせたい」と目を輝かせて語ります。

自分にできることで社会と関わる——ボランティアは三原さんのライフスタイルの一部なのかもしれません。



キャンプに行ったり伝統行事に参加したり、子ども会のリーダーは三原さん。



まつうらかずこ
松浦和子さん
職業 市民活動支援センター職員
赴任地 ヨルダン
赴任地での職種 保健師

社会と関わりたい気持ちを支援。 人と人のつながりをつくっていく。

「何かしたい」と思い立ったら、とにかく相談してみる。それが、防府市市民活動支援センター。趣味の仲間を作る、作品展を開く、ボランティアを始める……。一人ひとりの気持ちを、地域を元気にするエネルギーに換えていくのが、松浦さんの仕事です。



プロフィール

山口県防府市生まれ。保健師としての専門性を活かして、2006年に青年海外協力隊員としてヨルダンに赴任。帰国後はNPO法人市民活動さぼーどねっとに所属。防府市民のさまざまな活動を支援している。

青年海外協力隊の活動先で 現地の人に支えられた

青年海外協力隊員として赴任した先はヨルダン。生活習慣も文化も大きなギャップがある土地で、松浦さんは「たくさんの人に支えられて2年間、生活することができた」と振り返ります。

「一人で暮らすという概念が、アラブにはないですよ。みんな、大家族で暮らしているでしょう」

食事を提供してもらったり、送り迎えをしてもらったり、周囲の人が気を配り手を貸してくれたおかげで、2年間、不自由を感じることなく過ごすことができました。ボランティアで行ったつもりだったのに、「現地の人に支えられた」という思いが強く残っているそうです。



あれこれと世話を焼いてくれたヨルダン保健センターの同僚たちと。

気持ちを実現するのは 人のつながり

「人と人は関わり合って生きている」という言葉が、松浦さんの口から何度も出てきます。「だから、人と人の関わりを広げるお手伝いをしたいんです」

松浦さんは今、「何かしたい」という人をサポートするコーディネーターの仕事をしています。社会と関わりたいという人に、例えばサークルを作るとか、発表の場を見つげるとか、気持ちを具体化する方法をアドバイスするのです。



英会話や中国語会話などの市民団体同士の交流を促す「もんじゃ焼き国際交流会」を発案し、開催。

「やりたいという思いがあれば、実現させる方法はいろいろあります。まずはその思いを発信するなど、一歩踏み出すことが大切だと思います」

防府は多様な文化が共生する町 もっと交流の機会を広げたい

松浦さんは、防府市に住む人が国籍を超えて交流するイベントの開催など、国際交流活動にも関わっています。



地域のイベントにも積極的に参加し、フェアトレード商品などを紹介・販売している。

「防府市にも多様な文化が共生しています。地元でできる国際協力のひとつとして、私がヨルダンで支えてもらったように、ここに住む外国の人たちのサポートをしていきたい。今はイベントを開催するなどして、その思いに共感してくれる人を増やしていっています」

人を支えるのは人のつながり。それは、ヨルダンでも防府でも同じこと——その思いが、松浦さんを動かしています。